

# ロシア・ウクライナ紛争の宗教的側面

## — その歴史的展開 —

岩 城 聰

### はじめに

ロシアによるウクライナ軍事侵略が始まってから1年以上が経過した。その影に東方正教会内の対立や、ローマ・カトリック教会を始めとする西方教会との対立が見え隠れすることは多くの方の気付くところであろう。筆者は2019年6月にウクライナのキエフおよびチェルノブイリ、リヴィウを訪問し、多くの人々と交流するとともに、多数の教会建築を見学し、礼拝を体験することができた。その旅でも、ことに西部のリヴィウには多数のギリシア・カトリック教会<sup>(1)</sup>が存在し、東方正教会とは異なる雰囲気を感じられた。一方、2022年の復活祭の折、ロシア正教会のキリル総主教がプーチンの傍らに立ち、ウクライナ侵略を進めるプーチン・ロシア大統領を祝福して、全世界を驚かせた。キリルは核兵器さえ祝福したのである。

しかし、この対立の背景にある歴史的、神学的、宗教社会学的本質は、研究者の間でもまだ十分に明確になっているとは言いがたい。現時点で進行中の事態であることから十分な研究が望めないのは当然かもしれない。

本稿は、ロシアとウクライナの政治、文化の歴史的検討を中心にしつつ、その背景を貫いているこの地域での宗教、とくにキリスト教の特徴と内的葛藤を明らかにする初歩的試みである。

なお、地名の表示については、2022年3月に日本外務省がウクライナの要請により、ウクライナ語読み表示に変更されたが、本稿においては、従来研究書等において用いられてきた表示を用いることとする（例：「キーウ」は従

来通りの「キエフ」)。

## 1. ロシアとウクライナの共通のルーツ

### ①キエフ公国における東方正教

8世紀後半に成立したキエフ公国が、ウクライナ、ロシア、ベラルーシの共通のルーツであることはよく知られている。この公国は当時東ヨーロッパ随一の強国として栄えていたと言われる。そして、スラブ世界にキリスト教をもたらしたのも、このキエフ公国であった。

『ロシア原初年代記』によれば、987年にキエフ大公ヴォロディーミルが、ローマ・カトリック、イスラム、ユダヤ教、ビザンティン帝国のギリシア正教を調査、比較し、コンスタンティノポリスにおける教会堂の美しさ、華麗な典礼を高く評価していることが記されている。翌988年、ビザンティン帝国に進軍した大公は洗礼を受けることを前提にビザンティン皇帝の妹と結婚し、キエフに凱旋した。そして、ギリシア正教を国教と定めるのである。そのため、ヴォロディーミルは聖公と呼ばれるようになった。なお、ヴォロディーミルの祖母に当たるオリハは、すでに957年にコンスタンティノポリスで洗礼を受け、キリスト教徒になっている<sup>(2)</sup>。

ヴォロディーミルの跡を継いでキエフ大公となったヤロスラフは1037年にキエフにソフィア大聖堂を建立し、図書館を設けてキリスト教の文献の翻訳を命じた。そのため彼はヤロスラフ賢公と呼ばれている。このソフィア大聖堂にはキエフ・ルーシ公国内の正教を統括する府主教座が置かれ、スラブ世界での正教の中心地として栄えた。聖堂外壁は数度の改修を経ているが、内部は現在もなお当時の姿を現在に伝えている。

その後キエフ公国は公位の継承をめぐる軋轢から、衰退の過程に入る。

### ②モンゴルによる支配（タタールの軛）

さらに重大なのは、モンゴルによる本格的な侵略が始まったことであった。チンギス・ハーンの孫であるバトゥは1240年にキエフを攻略し、税の収奪に

よって「タタールの軛」とよばれる支配体制を築いた。そして後には、ヴォルガ川下流のサライを都とする「キプチャック・ハーン国」(1243～1502年)を建てたのである。14世紀初頭にタタールがイスラムに改宗してからは、正教会に対する態度は明白に敵対的な性質を帯びるようになってきた。

モンゴルの支配は、東は中国、中央アジア、中近東、東ヨーロッパにいたる広大な地域に及んだ。時代によって変化するが、チンギス・ハーンの子孫たちがジョチ・ウルス<sup>(3)</sup>などに分かれて支配権を確立し、現地の支配勢力を用いて人々を抑圧・搾取する。これらのウルスはすべてイスラムに改宗したため、イスラム世界の中心勢力ともなったのである。旧ペルシア帝国から中央アジアに広まっていた非カルケドン派の諸教会は、イスラム＝モンゴル勢力の前に崩壊への道をたどった。

### ③ウクライナにおける政治勢力の変化

ウクライナはロシアの南西に位置し、西ヨーロッパとロシアに挟まれ、本来、キエフ・ルーシ発祥の土地でありながら、西からはポーランド、リトアニア、ハンガリーの影響と支配に脅かされ、東からはロシア帝国の支配を受けてきた、いわば東西の狭間に置かれた地域である。豊かな黒土地帯を有し、「穀倉地帯」とよばれてきたが、ロシア帝国からは「小ロシア」と蔑称され、国家としては「国がない」といわれるほど不安定な状態であった。「ウクライナ」という呼称が用いられるようになったのは16世紀のことで、ドニエプル川両岸に広がるコサック地帯を指すようになった。19世紀になってロシア帝国がこの地方全体を支配下におさめる頃には、現在のウクライナ全体を示す言葉となった。19世紀のウクライナの国民詩人シェフチェンコは、「小ロシア」を屈辱と植民地的隷属の言葉として排除し、「ウクライナ」をコサックの栄光の歴史と国の独立に結び付けて用いたといわれている<sup>(4)</sup>。

モンゴルによる1240年のキエフ公国征服の後も、公国南西部にあったハーリチ(ガリツィア)公国とヴォルイニ(ヴォリニア)公国が合併しハーリチ・ヴォルイニ公国を構成し、1世紀近く存続した。「最初のウクライナ国家」とよばれている<sup>(5)</sup>。

14世紀半ばにハーリチ・ヴォルニ公国が滅亡してから、17世紀半ばにコサックがウクライナの中心勢力になるまでの約300年間、ウクライナの地はリトアニアとポーランドによって支配された。この期間にルーシはロシア、ウクライナ、ベラルーシの三民族に分化したといわれる<sup>(6)</sup>。

リトアニアはスラブでもゲルマンでもない独立した民族であり、古代からの独自の宗教を信じていた。しかし、14世紀頃のリトアニアはバルト海沿岸からウクライナの広大な地域を支配下におさめており、1362年にはキプチャク・ハーン国と戦い、ヨーロッパ側として最初の勝利を収めた。

リトアニアに次いでこの地域に手を伸ばしたのはウクライナと同じスラブ系のポーランドであった。ポーランドは10世紀頃からローマ・カトリックを受容していたため文化的には異質であり、強い圧力をウクライナ社会に与えた。14世紀にはハーリチ地方はポーランドに併合され、第二次世界大戦までの四世紀半、ポーランドに支配されることとなった。そのため、リヴィウを中心とするハーリチ地方は、西ヨーロッパの影響が強く見られる<sup>(7)</sup>。後述するが、キリスト教におけるその明白な現れが、ギリシア・カトリック（ユニエイト）の広まりである。

15世紀頃からは、「コサック」とよばれる武装自治集団が登場する。ロシア、ポーランド、リトアニアなどから自由と豊かな自然環境を求めて集まった彼らは、組織を作り、武装してタタールと対峙した。「コサック」という言葉は、トルコ語で「分捕り品で暮らす人」あるいは「自由の民」を意味する。ドニエプル川の中・下流には彼らが住む町がいくつもでき、「コサックの町」とよばれた。16世紀末までにコサックの町は「ヘトマン」とよばれる指導者によって率いられるようになる。

やがて17世紀になると、コサックはウクライナで活動する「ザポロージェ・コサック」と、ロシア辺境の「ドン・コサック」とに分岐することになるが、軍事力も増大し、キリスト教世界とイスラム世界との境界線に位置する一つの政治・軍事勢力として存在感を示していく。コサックの組織はヘトマン、スタルシーナ（長老グループ）、ラーダ（全体会議）からなり、ヘトマンは初期にはポーランド王によって任命されたが、後にはラーダによって

選ばれた。これらの組織によって統治されるザポロージェ・コサックは2万人といわれた。彼らの目的は、①正教・キリスト教の擁護、②ウクライナ人の保護、③コサックの自由と自治、であった。

ウクライナ固有の文化とナショナリズムが醸成されたのも、コサックの活動によるところが大きかった。17世紀に頭角を現したサハイダチニーは最初の偉大なヘトマンといわれ、コサック軍の軍規、階級、秩序を作り、コサック軍をゲリラ的な軍から正規軍に変えた。1621年、ウクライナ南部のホーティンで4万のコサック軍を動員して10万のオスマン・トルコ軍を食い止めるのに決定的な役割を果たし、ポーランドを危機から救った。そのため、ローマ教皇から「世界の守護者」としてほめ讃えられた。

さらにサハイダチニーは、ウクライナの文化、教育、正教の振興に尽くした。彼が庇護した正教非聖職者の団体「エピファニー同胞団」は、1632年にペチェルスク修道院長・キエフ主教ペトロ・モヒラによって「キエフ・モヒラ・アカデミー」という学校に発展し、現代にも引き継がれている。「キエフ・モヒラ・アカデミー」は正教の教育機関ではあるが、イエズス会の学校をモデルとし、ラテン語、ギリシア語の教育にも力を入れた。後にこの学校はウクライナだけでなく、ロシアを含めたスラブ社会における最も重要な教育機関となり、優れた聖職者や学者を生み出した<sup>(8)</sup>。

このアカデミーは1817年以来ロシアによって閉鎖されていたが、1991年のウクライナ独立後（つまり、ソ連解体後）、同じ敷地と建物を使って「キエフ・モヒラ・アカデミー大学」として復活した。黒川祐次はこの大学について、「ウクライナ語を教育用語とするもっとも民族主義的な大学であるが、同時に自由、民主主義、市場経済といった西側の価値観を意欲的に吸収しようとしているもっとも開かれた大学である」<sup>(9)</sup>と述べている。ここに西側と東側、カトリック的スラブ圏と正教的スラブ圏の間というウクライナの特徴が明確に現れている。それは、まさにウクライナにおけるキリスト教の特質でもあるだろう。

17世紀にポーランドへの隷属と闘ったコサックの指導者もいる。ボグダン・フメリニツキーである。フメリニツキーは組織者、軍事指導者、外交官

としてウクライナの歴史の中で初めて自分たちの国家を作り上げたといわれる<sup>(10)</sup>。彼はポーランドと闘うために長年の敵クリミア・タタールと同盟して、1648年にポーランド軍を破り、同年10月にはワルシャワ近くまで迫った。こうしてポーランド王はコサックの伝統的権利を承認し、彼は偉大なヘトマンとよばれるようになった。ここにも、ポーランドにもトルコにもロシアにも屈しないウクライナ民族主義の足跡を見て取ることができる。

## 2. カトリック的スラブ圏と正教的スラブ圏の間

### ①ロシア正教の確立と第三のローマ

一方、14世紀に入ってから、スラブ民族の中ではモスクワ・ロシアが台頭し、キプチャック・ハーン国との戦いに勝利するにいたる。1326年、モスクワ大公国はまだ弱小ではあったが、キエフ府主教ピョートルはこの新興国にロシア正教会の首座を移すことを決断した。しかし完全な自治独立権が認められるまで、ロシア正教会はコンスタンティノポリス総主教の管轄下であり、しかも府主教に任じられたのはほとんどがギリシア人であった。

1380年に、モスクワ大公ディミトリーはクリコーヴォ平原の戦いで40万のタタール軍を打ち破って勝利を取めたが、その後もモンゴルの後継チムール帝国の圧迫を受け、タタールの軛からロシアが解放されるのは、イヴァン三世（在位1462-1505年）の時代になってからであった。

一方、1453年、オスマン・トルコによってコンスタンティノポリスが陥落し、東ローマ帝国が最終的に滅亡すると、モスクワ大公国がビザンティン帝国の後継者の名乗りを上げ、正教世界の中心として台頭し始める。それによって、モスクワは「第三のローマ」<sup>(11)</sup>であるという理念が形成されていくのである。こうしてモスクワ府主教イオフが初代の「モスクワおよび全ルーシの総主教」に叙階され、モスクワ教会はコンスタンティノポリス、アレクサンドリア、アンティオケア、エルサレムという使徒時代以来の総主教座と並ぶ地位と権限を獲得するにいたる。

ロシア正教は、その後、政治権力における「ツァーリズム（皇帝支配）」を

宗教的に支えるものとして、現代にいたるまで権力構造の柱として存続している。政治と宗教の関係は、西方教会におけるよりもはるかに密接であるといえることができるであろう。その母体である東ローマ帝国のキリスト教（ギリシア正教）においても、もともと皇帝権力と教会指導部が癒着し、皇帝教皇主義（Caesaropapism）<sup>(12)</sup>ともいふべき体質が醸成されていたのである。これについては後述する。

もともと、1682年に即位したロマノフ王朝三代目のピョートル大帝は、国家と教会の関係を西ヨーロッパに倣って変えようとした。彼は大々的な西欧化政策を実行し、新首都としてサンクトペテルブルクを建設するとともに、経済・軍事・技術の各面で、西欧のシステムを採り入れようとした。宗教の面ではロシア正教の独立性を奪い、国教制度を採り入れようとし、聖宗務院制度の下で教会を国家の支配下に置き、それに抗する教会の動きを厳しく抑圧した。以後200年にわたって教会は「帝国の囚われの身」に甘んじることとなる。

ウクライナを含む東スラブの歴史を概観する上で見落としてはならないのが、オスマン・トルコの政治的支配力である。ウクライナをめぐるのは、モンゴル系のイスラム国家であったクリミア汗国（ジョチ・ウルスの後継国の一つ）をオスマンが属国化し、クリミア汗国の経済の主力であった奴隷の供給元として確保することによってこの地方に宗主国としての力を及ぼしたのである。また、ブルガリアなどバルカン半島の民族も長期にわたってオスマンの影響下に置かれることとなった。東方正教会文化圏に属する国々の特殊性を明らかにする上で、正教司祭の高橋保行は次のように述べている。「かつてビザンティン帝国の主要部分であったギリシアをはじめとしてバルカン半島の正教国がすべてイスラム・トルコ政権下に置かれた後に、唯一正教国として自由であったのはロシアのみであった。ここにロシア教会が正教会を代表しているかのように思われるようになった理由がある。さらに19世紀にやっとイスラム・トルコから独立した正教文化圏の国々は、20世紀の初頭に今度はロシアの影響を受けて、自主的あるいは強制的に、共産主義の下に置かれるようになった。イスラム政権の下から独立して、一旦浮上したかの

ように見えた正教文化圏は、そのまま無神論政権の下に置かれるようになった」<sup>(13)</sup>。

この指摘は、いわゆる「共産主義」に対する分析やオスマンの宗教政策に対する細部の分析・評価は不十分であるものの、大筋において正教文化圏の置かれた状況を言い当てていると思われる。

## ②東西教会の大分裂とギリシア・カトリックの誕生

14世紀にはハーリチ地方がポーランドに併合され、第二次世界大戦までの四世紀半、ポーランドの支配下にあったことはすでに述べた。そしてポーランドはローマ・カトリックを受容しつつ、「宗教的寛容」の精神の下、他の諸宗教を受け入れはじめた。まず、ドイツ人の下で圧迫されていたユダヤ人を大量に招き、特権を与えて商業や家内工業に従事させた。また、14世紀後半にはセルジユク朝の圧迫を逃れたアルメニア人が移住し、リヴィウにアルメニア教会<sup>(14)</sup>の主教座を設けた<sup>(15)</sup>。

このような宗教的多元状況の中・近世における代表的な現れが、いわゆるギリシア・カトリック（ユニエイト、ユニア）教会の出現である。その大きな背景として、まず、東西教会の大分裂についてふれておきたい。

### 〈東西教会の分裂の経過と対立点〉

東西ローマの分裂、西方におけるゲルマン民族の優位、東方におけるイスラムの勃興、十字軍による略奪などを背景に、コンスタンティノポリス総主教座とローマ教皇の間の対立はますます深まっていった。この対立はやがて東西教会の決定的分裂へと至るのである。

1054年にコンスタンティノポリス総主教ミカエルー一世ケルラリオスとローマ教皇レオ九世が相互に破門状を叩きつけて東西教会の決裂を決定的なものにした際に、ローマ・カトリック教会は次の四つの点を認めることを東方正教会に要求していた。それは、①教皇至上権を認めること、②聖餐でパン種の入らないパンを用いること、③煉獄の教義を認めること、④信経における聖霊の発出源に関して「フィリオクエ（子からも）」という語句を挿入す



ることを認めること、であった。この内、とくに教理に関わる東西の対立を集中的に表している「フィリオクエ」問題を取り上げることとする。

### 〈フィリオクエ問題〉

フィリオクエ (filioque) というのは、ラテン語で「子からも」を表す語句である。聖霊の発出をめぐる、元来の「ニカイア=コンスタンティノポリス信条」では「聖霊は父から出て」とあるのを、ローマ・カトリックは西方教会のみのトレド公会議 (589) の決議として、信経のなかに「聖霊は父と子から出で」とすることを決め、さらに 809 年のアーヘン司教会議で、公式に信条に語句を挿入することをカール大帝が是認した。最終的には 1014 年にベネディクト VIII 世によって決定され、ミサ式文の中ではそのテキストを唱えることとなった。

東方正教会はこれを認めず、「聖霊は父から出て」としている。ローマ・カトリックがこの語句の挿入を決めたのは、西方教会の三一神論において、三つの位格の対等性が保証されるような表現を求めたからであろう。聖霊が父からのみ発出するのであれば、三つの位格の内「父」が上位に位置するのは避けられないと西方教会は考えたからである。また、東西両教会の代表を含めた「全地公会」の決議を経ずに、ローマ・カトリックが一方的にこの語句をコンスタンティノポリス信条に付加したのは、認めることができないというのが東方教会の反対論のもう一つの根拠であった。なぜなら、コンスタンティノポリス信条は正統信仰の最終的決定であり、付加も削除も許されないからである。

### 〈三一神論の相違〉

この背後には、東西における三一神論の相違という問題があるのはいまでもない。この点については、まず、山田晶の『アウグスティヌス講話』における以下の平易かつ明快な説明を理解の前提としておきたい。

「東方教会において、三つのヒュポスタシスの関係が、御父→御子→聖

霊（聖神）というように、いわば直線的な発出の線を辿るのに対して、西方教会において、三つのペルソナの関係は、御父と御子とから聖霊が発出するというように、いわば逆三角形の形をとります。すなわち、聖霊の発出において、御子は御父から発出する聖霊がそれを通過する単なる道としての役割を演ずるのみではなく、御父と共に働いて、聖霊がそこから発出する、御父と並ぶ聖霊のもう一つの根源としての役割を得ます<sup>(16)</sup>。

そして、西方教会のこの解釈への道を開いたのは、アウグスティヌスであると山田は指摘している。事実アウグスティヌスはその『三位一体』の第一卷第四章において、「聖霊は御父でも御子でもなく、ただ御父と御子の霊であり、かつ御子と御父に等しく、三位一体の統一性に属している<sup>(17)</sup>」とはっきりと叙述しているのである。さらに山田は、アウグスティヌスが「御子を神の『言』として、聖霊を神の『愛』として<sup>(18)</sup>」把握していると述べ、三位一体の構造が、単なる「逆三角形」ではなく、また、直線的な流出の関係ではなく、「同一の神の精神における動的な円環の関係として、より緊密な仕方で結合<sup>(19)</sup>」されていると述べている。

これに対して東方教会の聖霊論は、「ペーゲー（源）」としての父から流出することが基本である。「ニュッサのグレゴリオスの教説では、聖霊を生み出す際に行為者として働く子が、三一神の根源である父に明白に従属している。彼以後の東方教会の正式な教説においては、聖霊が『子を通じて父から』発出したとされている<sup>(20)</sup>」。これは、プロティノスに始まるネオ・プラトニズムの流出論を三一論に咀嚼・援用したものと言えるだろう。

東西教会の三一論の相違の背景には、三一論で用いられる用語（ラテン語とギリシア語）の不一致という問題も存在していると考えられる。テルトゥリアヌス以来西方の三一論において「位格」を表す語として用いられた *persona* は本来「仮面・顔」の意味をもつ単語（同様に用いられた *prosopon* 「顔つき」を意味する）であるが、それに対して東方で「位格」の意味で用いられた用語は、*hypostasis* であった。*hypo*～は「下に」を意味する接頭語で

あって、hypostasis は自存性の強い意味合いを含蓄し、「実体（ラテン語では substantia）」に近い意味を表すと考えられた。そのため西方と東方の間の論争においてかなりの混乱をもたらした。アウグスティヌスもこの問題には注意深く対処している。

「私たちの仲間であるギリシア人は『一つの本質・三つの実体』という語を用いたが、ラテン人は『一つの本質あるいは実体・三つのペルソナ』という語を用いた」。「私たちの言語であるラテン語では、本質と実体は同じ意味に理解されるのが常だからである」<sup>(21)</sup>。

このような三一論の相違や「フィリオクエ」をめぐる論争に関して、11世紀までは明白な相違にもかかわらず、両者の交わりが続けられてきたことに注意したい。WCC 信仰職制委員会のレポート『神の霊・キリストの霊』の第一章を担当したルーカス・フィッシャーは「この二つの三一論の伝統は、相分かれたものであり、しばしば互いに摩擦を生じながらも、相互に排他的であるとは考えられてこなかったのである」。「11世紀の後になって初めて、この二つの伝統は、互いに相容れないものとして考えられるに至ったのである」<sup>(22)</sup>。

### 〈東西両教会再合同の挫折とギリシア・カトリック〉

ローマ教皇とコンスタンティノポリス総主教との相互破門によって断絶した東西教会も、その後の世界情勢、とくにイスラム勢力の台頭に迫られて、ビザンティン帝国の側からの支援要請と、ローマ・カトリックの勢力圏拡大の欲求とが相まって、幾度か再合同の協議を重ねることとなった。

とくに差し迫った状況を生み出したのは、オスマン帝国による脅威であった。それに対抗するため、15世紀には東西両教会の合同を目的としたバーゼル公会議（1431年）、フェラーラ公会議（1438年）、フィレンツェ公会議（1439年）が開かれた。ローマ・カトリック側が提出した合同の条件としては、①ローマ教皇の首位権を承認する、②「聖霊は父からでて子を通して発出する」と「聖霊は父と子から発出する」は同じ意味であることを承認する（つまり「フィリオクエ」を認める）ことであった。

フェララ公会議では、東西両教会はそれぞれの優位性と正統性を主張して譲らなかったが、翌年フィレンツェの大聖堂で再開された会議には、ビザンティン帝国からも皇帝とコンスタンティノポリス総主教をはじめとして主教、神学者など総勢 700 名が参加し、粘り強い協議が積み重ねられた。フィリオクエ問題については、「父と子から」は「父から出て子を通じて」と同義であるとの解釈をとり、ローマの首位権については引き換えに東方正教会の典礼には変更を加えないという妥協が図られた。その結果、翌 1439 年には、東方教会の大多数は東西教会の再統一に賛成し、協定に調印したのである。ところが、フィレンツェ公会議に<sup>(23)</sup> 出席したロシア教会の代表、モスクワ府主教イシドール(コンスタンティノポリス総主教によって任命されていた)がモスクワに帰任してこの報告を持ち帰ったところ、モスクワの賛同を全く得られなかったばかりか、大公の命令によって拘留され、その後追放処分にあった。モスクワ大公ヴァシリイ二世は、イシドールに代わってロシア人の主教イオナを選任して、自治独立権を有するロシア正教会を設立することに成功したのである。

さらに、1453 年、オスマン・トルコによってコンスタンティノポリスが陥落し、東ローマ帝国が最終的に滅亡すると、皇帝によって承認された合同問題は立ち消えとなった。コンスタンティノポリス大主教の権威も失墜し、代わってモスクワ大公国がビザンティン帝国の後継者の名乗りを上げ、正教世界の中心として登場することになる。

ビザンティン帝国滅亡によって立ち消えとなった東西教会合同問題は、百数十年後にポーランド・リトアニアを舞台としてローカルな合同として復活する。それが 1595 年のブレスト教会会議である。当時現在のウクライナに当たる地域はポーランド・リトアニア連合国の支配下であり、カトリック君主のもとで「ルテニア」と呼ばれていた。ルテニアの正教会はキエフ府主教座の管轄にあり、ローマ・カトリック教会が占めていた地位からははるかに劣った扱いしか受けていなかった。さらに、西方教会における宗教改革とそれに対抗するカトリック宗教改革の圧力が強まる中で、1590 年 6 月に開かれた教会会議でルテニアの四人の正教主教たちが教会合同への参加を表明し、

東方典礼の維持を骨子とする合同のための「三十三箇条」<sup>(24)</sup>が練り上げられ、1595年のブレスト教会会議で完成するに至るのである。「三十三箇条」は同年7月に国王に提出され、国王は布告をもって回答とした<sup>(25)</sup>。

この教会合同によって生まれた教会は、ギリシア・カトリックとして、東方典礼を守りつつローマ・カトリックに帰属する教会（東方典礼カトリック教会、東方帰一教会、ユニエイト、ユニアなどともよばれる）となった。ウクライナ西部（ドニエプル川右岸地方）においてはこの教会が主要な宗教となったが、これらの地域がロシア帝国領となってからも、ギリシア・カトリックはローマ教皇への忠誠を止めなかったため、ロシア帝国によって禁止された<sup>(26)</sup>。

現在のリヴィウを中心とするウクライナ西部のハーリチ（ガリツィア）地方には、このギリシア・カトリックの教会が集中して存在している。筆者が2019年に西ウクライナ（ハーリチ）の中心都市リヴィウを訪れた際にも、数多くのギリシア・カトリックの教会を目撃しており、礼拝をも体験している。礼拝堂も、元イエズス会の教会、元ドミニコ会の教会などローマ・カトリックの施設が転用されており、ローマ・カトリックがギリシア・カトリックを精力的に支援している様子がうかがわれた。さらに、リヴィウにはローマ・カトリックの大聖堂の他アルメニア使徒教会の主教座聖堂もあり、ウクライナにおけるキリスト教の多様性を実感することができた。ギリシア・カトリックは、東ヨーロッパから中近東にかけても存在しており、ローマ・カトリック教会とはフルコミュニオンの関係にある。現在のウクライナのキリスト教を論ずる上では、これらの教会の存在が一つの鍵を握っていると言える。また、近世以降のウクライナ民族主義の背景には、ギリシア・カトリック教会の存在が大きな役割を果たしている。

### 3. ロシアおよびソヴィエト連邦の支配下におけるウクライナ

#### ①ウクライナ・ナショナリズム

すでにこれまでの検討からも、ロシアとウクライナの宗教や文化が、共通

のルーツを持ちながらも、周囲の政治的勢力、教会間の協力と軋轢から、分化と対立の芽が育まれていることを見て取ることができる。そして、東西の狭間にあつて、自己主張を始めるウクライナの声も次第に大きくなっていくのである。

ロシアとウクライナの軋轢を孕む関係は、19世紀から20世紀にかけて熟成し、悲劇的な結果をもたらすことになる。

ロシアによるウクライナ併合が行われたのは、1765年、エカテリーナ二世の治世である。さらに1774年、ロシアとトルコは条約を結び、ロシアはドニエプル川とブーフ川の間にもたがるトルコ領の黒海沿岸地帯を獲得し、クリミア汗国の独立をトルコに認めさせた。そのためザポロージェ・コサックの利用価値がなくなったため、ロシア軍はコサックの拠点のシーチを破壊し、ザポロージェ・コサックの廃止を宣言した。この間200年以上にわたってウクライナ・コサックの中心であり、コサックの精神の象徴であったザポロージェ・コサックは消滅した<sup>(27)</sup>。

その後、ヘトマン国家は廃止され、その領土は、1780年にはロシアによる知事が治める一地方として存立することとなった。また、西ウクライナはポーランド分割の結果、ロシアとオーストリアがそれぞれ手に入れた地方を支配することになる。ハーリチはオーストリアの支配下に入る。ロシア帝国では「ウクライナ」というのは正式名ではなく「小ロシア」が公式の名称であった。ウクライナ人は「小ロシア人」と呼ばれていた。こうしてウクライナの民族的アイデンティティーは否定され、言語においてもロシア帝国ではロシア語の一方言にすぎないとされ、一段卑しい言語と言われていた。高尚なことはロシア語で表現すべきだと考えられていた。

ところが19世紀には、ウクライナ独自の文化、歴史、民話などへの関心が高まり、ウクライナ・ナショナリズムが勃興していた。1834年にはキエフ大学が設立され、ウクライナ語は独自の言語であることが判明したのである。その中から、「ウクライナ語の最大の文学者」とよばれるタラス・シェフチェンコ（1814-61）が現れる。キエフ南方のモーリンツィ村で農奴の子として生まれたシェフチェンコは、少年時代に教会学校に住み込み、辛い仕事に従

事しつつ、教会にある祈禱書や聖歌集、詩編などを学びながら教会スラブ語を身につけた。その時、ウクライナ文学の古典を読み、文学的素養を身につけた<sup>(28)</sup>。絵を描くことを身に着けたのもこの時期である。1838年、24歳の時農奴の身分から解放されたシェフチェンコは正式に美術アカデミーに入学を許され、併せてウクライナの自然と生活、伝承を詩に謳うことを学んだのである。シェフチェンコの処女詩集『コブザール』は、コサックの活躍した過去の栄光の時代を生き生きと描き、民族の歴史への誇りを謳い上げた。また、ポーランドの支配層と闘ったハイダマキ運動<sup>(29)</sup>を謳った詩『ハイダマキ』は、ウクライナの英雄たちを讃えた一大叙事詩である。ロシア政府はこれらの詩を、反ロシア感情を煽ったとして弾圧した。その後シェフチェンコは秘密結社とのつながりを理由に逮捕され、ロシア南部に流刑となる。1855年にニコライ一世死去による恩赦を受け、晩年の活躍が始まる。シェフチェンコは生涯の最後まで、農奴制との闘いを貫き1861年に逝去した。

このシェフチェンコによって代表されるウクライナ民族主義は、19世紀末から20世紀初めにかけて穏健派から過激派にいたる各種の結社や政党となって自己表現をすることになる。1900年にはロシア帝国内ウクライナの最初の政党である「革命ウクライナ党 (RUP)」が地下政党として結成され、社会民主主義者とマルクス主義者の双方を結集する。レーニンに影響されたグループは「ウクライナ社会民主連合 (Spilka)」を結成し、やがてロシアのメンシェヴィキやボルシェヴィキの系統に分岐する。こうして、ロシア革命と密接に連動しつつ、ウクライナでの革命が進む<sup>(30)</sup>。しかしこれらの勢力はいずれも、ウクライナの自主性、民族的アイデンティティーを認めようとはしなかった。一方ウクライナ独自の革命勢力はウクライナ国民共和国を樹立するが、ロシアのポリシェヴィキ政権とは対立する。やがてウクライナでは激しい内戦となり、最終的にはロシア共産党の圧力の下でウクライナ・ソヴィエト共和国として、ソヴィエト連邦の一員となるのである。この過程で、ウクライナの民族主義は徹底的に抑圧され、以後、ソ連解体・ウクライナ独立に到るまで、70年間、その民族的アイデンティティーを回復することはないのである。

1991年、ソ連崩壊後ウクライナが独立するに及んで、ウクライナ民族主義がその力の源泉としたのは、やはり西ウクライナ、とりわけハーリチの文化的伝統であった。ロシア帝国やソ連において禁止されていたギリシア・カトリック（ユニエイト）も、ウクライナの民族主義的運動の原動力となった。2004年には、大統領選挙において親ロシア派のヤヌコーヴィッチ陣営の不正があったとして再選挙の結果、親EU派のヴィクトル・ユシチェンコ大統領が誕生した。この選挙をめぐる国民の運動は「オレンジ革命」とよばれている。しかし、発足したユシチェンコ政権は内部で対立を抱えて挫折し、2010年には再びヴィクトル・ヤヌコーヴィッチが選挙によって大統領に返り咲くという皮肉な結果を生んだ。

しかし、2014年2月に、ヤヌコーヴィッチ政権の腐敗、親ロシア政策などに反発する「ユーロ・マイダン革命」が起こり、ヤヌコーヴィッチは失脚、ロシアへ逃亡するに到った。主要ポストは総入れ替えとなった。その後、アレクサンドル・トゥルチノフ代行大統領、ペトロ・ポロシェンコ大統領を経て、「国民の僕」を率いるゼレンスキー大統領が生まれた。この政治の流れは、ソ連からロシア帝国に至るまで底流として流れるウクライナの独立を阻もうとするロシア大国主義に対するウクライナ民族主義の抵抗であった。

## 4. ウクライナ正教の分離独立とロシアの宗教状況

### ①ロシア正教からのウクライナ正教会独立

複雑な歴史的過程を辿ってきたウクライナのキリスト教は、実に多元的状況を呈している。主なものだけでも西欧キリスト教と価値体系の多くを共有している東方典礼カトリック教会（ユニエイト）、およびウクライナ正教会、ウクライナ正教会（モスクワ総主教庁系）、アルメニア使徒教会が存在している。ごく少数であるがローマ・カトリック教会、プロテスタントの教会も存在している。最も信徒数が多いのが、ウクライナ正教会であり、ウクライナ人の約38.6パーセント、1754万人を占めている。しかし、現在のウクライナ正教会が成立したのは2018年であり、成立に至るには、歴史的に複雑な経緯



を經ているのである。

ロシア革命の直後 1918 年 1 月に、全ウクライナ公会が開かれ、モスクワ公会から祝福を受けたが、ウクライナの信徒の多数からは拒絶された。独立性・同位性・自立性 (autocephaly) が否定され、モスクワ総主教庁内での自治しか認められなかったからである<sup>(31)</sup>。1921 年、1942 年、1992 年にも一部のウクライナ正教会の聖職・信徒が独立した正教会を作ろうと試みたが、彼らの形成した教会は世界的な正教会共同体による承認を得られなかった。

2018 年 4 月、ウクライナのポロシェンコ大統領は、再び独立したウクライナ正教会を設立しようと試みた。当時、ウクライナ正教会であると主張する教会は三つ存在していた。ウクライナ正教会－モスクワ総主教庁、ウクライナ正教会－キエフ総主教庁、そしてウクライナ独立正教会であった。その結果、後二者が合同して 2018 年 12 月に新生のウクライナ正教会が発足し、首座主教としてエピファニー府主教が選任された。ウクライナ正教会－キエフ総主教庁の首座主教であったフィラレート総主教は、新生ウクライナ正教会の名誉総主教となった。典礼言語も、教会スラブ語、ウクライナ語、ロシア語から、ウクライナ語に変更された。これはもともと、各民族における自立性を重視する正教の伝統にかなった措置であった。

ポロシェンコのプロジェクトを支持したのはコンスタンティノーブル<sup>(32)</sup>のエキュメニカル総主教であるバルトロマイー一世であった。コンスタンティノーブル総主教座は、その歴史的経緯から世界の正教会において名誉的な首位性を認められている。バルトロマイー一世は、ウクライナはもともとビザンティン帝国からキリスト教を受容したことから、コンスタンティノーブルがウクライナ正教会の独立を承認する権限があると主張し、2019 年 1 月、新生ウクライナ正教会の独立・同位・自立 (autocephalous) を宣言する正式な教令 (トモス) に署名した。これに反発してロシア正教会モスクワ総主教庁は、全面的な断交を宣言した<sup>(33)</sup>。

ロシアとウクライナの軍事衝突はすでに 2014 年に始まっていたが、2022 年 2 月から全面戦争の様相を呈してきた。戦争そのものの政治的・軍事的分析・検討は本論の主たる関心から外れるが、現在進行中の戦争が正教会に与

えている影響について、即時性を重んじるためインターネットで報じられている事柄についてふれてみたい。

2022年4月8日、ウクライナ西部のウシュホロド市議会の代議員より「ウクライナの国益と領土の一体性を守るため」ウクライナ全土でウクライナ正教会－モスクワ総主教庁の活動禁止を求める請願が提出された。侵攻後に飛行場からわずか300メートルに位置するモスクワ総主教庁の教会から軍事用に梱包された大量の食料の備蓄や武器が見つかったことや、モスクワ総主教庁の司祭がウクライナ軍の配置についての情報をロシア軍に渡していたことが報じられたからである。それ以来、ウクライナ各地の市議会が、モスクワ総主教庁に属する教会の活動を禁止する決議を行っている。

また、司祭たちは全正教会の法廷に「キリル主教に対する訴訟」を求める署名を集め、キエフ総主教庁のオフヌリー・ペレゾフスキー大主教はロシアのプーチン大統領に対して「同胞が相争う戦争の即時停止」を要請し、モスクワ大主教庁の教区大主教であるエボロジー（東部スミイ市出身）は、配下の司祭たちに、キリル総主教のための祈りをやめるよう指示した。

世界的にも正教会指導者のプーチン批判の声が伝えられている。今回の戦争を批判する正教会の指導者としては、アレクサンドリアおよび全アフリカ正教会の総主教であるテオドール2世、ルーマニア正教会のダニエル総主教、フィンランド正教会のレオ大主教といった人々がいる。

## ②現代ロシアの教会

キリル総主教とプーチン大統領を結びつけるのは、「ルースキー・ミール（ロシア世界）」というビジョンであると報じられている。「ルースキー・ミール」とは、旧ソ連領の一部だった地域を対象とする領土拡張と精神的な連帯を結びつける構想である<sup>(34)</sup>。モスクワ総主教庁にとっては、ロシアとウクライナは同じ民族であり、この民族を切り離す民族主義はロシアの敵なのである。

現代ロシアの宗教事情と政教関係について研究している宮川真一（創価大学通信教育部・非常勤講師）によれば、ソ連消滅後、政治・経済・社会・文化・宗教のカオスの中で、ナショナル・アイデンティティーの模索が始まり、

その中で宗教の復興が重要な柱となっているという。とりわけ目覚ましく復活したロシア正教会は国の精神的支柱となり、政治的・社会的な影響力を強めている。1990年代初頭から「ロシア正教ナショナリズム」が台頭してきているが、「彼らの世界観はロシア革命前の正教君主制について極度に神話化された観念に基づいている。すなわち、君主制の復活、正教以外の信仰の制限、国家構成の帝國的原理の復活、国教としてのロシア正教会の地位、民主主義および人権（とりわけ良心の自由）という概念の完全なる拒絶を説くのである。ロシア正教ナショナリズムはロシアのアイデンティティー、世界観を護るために『専制・正教・民族性』という原理を掲げ、西欧、グローバリゼーションといった敵と闘う聖なる基盤に立った闘争という特徴を持つ」<sup>(35)</sup>。

併せて、現在ロシア正教会モスクワ総主教であるキリルが、元 KGB（ソ連国家保安委員会）のエージェントであったことも報じられており、ロシア帝国からソ連邦、ロシアにつながる政治と宗教（ロシア正教会）の癒着の深さが窺われる。これらの事柄が、ロシアによるウクライナ侵攻の背後に横たわっているのは疑いがないと思われる。

ソ連崩壊後のロシアにおける宗教状況について、2000年に行われた調査に基づいて宮川は次のように報告している。まず、無神論者、正教徒、その他、回答不能という大分類については、1991年に無神論者が40パーセントであったものが2000年には29パーセントに減少し、対照的に自らを正教徒と考える者が1991年には34パーセントであったが2000年には59パーセントに増加している。また、1997年の宗教法に基づいてロシアにおける宗教はヒエラルキーのもとに分類されている。伝統宗教に分類されるのは、多数派正教のほかイスラム、仏教、ユダヤ教であるが、それ以外にもローマ・カトリック、他国の国教となっているプロテスタント、ルター派、福音派バプテストが伝統宗教に属しているとされる。その他の宗教、あるいはセクトとされるのは、ロシア正教の古儀式派、その他のプロテスタント・セクト、および新宗教運動である。新宗教の中では、エホバの証人が急成長しているとされる。1946年には3000人であった信徒数が、1991年に3万人、2001年には28万

人であったとされる。エホバの証人は、「仕事を放棄し、親族とも交際せず、輸血を拒否して子を死亡させた」として反カルト団体から刑事告訴されていると宮川は報告している。

現状のロシアにおける宗教思想は、圧倒的にロシア正教会が指導権を握っており、ウクライナ戦争についてもプーチン政権の思想的支柱になっているのはロシア正教会である。ソ連崩壊後、その思想的支柱であった唯物論が力を失い、それを埋めるものとしてロシア正教が機能しているのである。異質な新宗教や少数派のキリスト教が流入してはいるものの、宗教的多元性を形成するには到っていないと思われる。ウクライナ戦争を支持するキリル総主教に対する批判はロシア正教会内部だけに焦点を合わせると、今のところ大きな動きにはなっていないように思われる。価値観の多元性をも担保する宗教的多元性は、まだ成熟していないからであろう。

## 註

- (1) このギリシア・カトリックは本論の中で中心的な論考の対象である。詳細は後述する。
- (2) 國本哲男・山口巖・中條直樹訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987、119-125頁
- (3) 遊牧民族の政治的・経済的単位。遊牧民族は絶えず移動し、その支配領土も一定しないため「国家」ではなくウルスとよぶ。
- (4) 黒川祐次著『物語 ウクライナの歴史』中公新書、2002、82-83頁
- (5) 前掲書 53-55頁
- (6) 前掲書 59頁
- (7) 前掲書 60-64頁
- (8) 前掲書 87-99頁
- (9) 前掲書 99頁
- (10) 前掲書 100頁
- (11) 16世紀初頭に修道僧フィロフェイによって提唱された理念。第一のローマは滅び、第二のローマであるコンスタンティノープルも滅び、モスクワこそが第三のローマとしてキリスト教世界（正教世界）の中心であると主張した。1589年、コンスタンティノープル総主教エレミアス二世が署名した文書には、「第三のローマたるあなたの偉

大なるロシア王国は敬虔においてすべての王国を凌いでいる」と記されている（廣岡正久著『ロシア正教の千年』講談社、2020、89-90頁）。

- (12) この「皇帝教皇主義」という用語については異論がないではない。皇帝は聖職者ではなく、奉神礼を執行していたわけではない。また、コンスタンティノポリス総主教は常に皇帝の言いなりになっていたわけではなく、教会は民衆に対する影響力を行使して帝権の意図を阻止することもあった。さらに、「皇帝教皇主義」という用語自体が皇帝権と教皇権が分立していた中世西ヨーロッパを前提とする見方であり、それを基準に異なる歴史を辿った東ローマ帝国および正教会の制度を異端視するかのような言説は必ずしも正当な議論とはいえない。しかしながら、教会と皇帝権力がこの表現を許すほど密接であったという事実もまた否定できないのである。
- (13) 高橋保行著『知られていなかったキリスト教 ― 正教の歴史と信仰』教文館、1998、22頁
- (14) アルメニア使徒教会は354年の教会会議でアリウス主義と同時に単性論を異端として退けたが、ローマにもコンスタンティノポリスにも属さない教会。301年にティリダテス三世の時代に、キリスト教は国教とされ。アルメニア使徒教会は現在も自国および世界各地で活動を続けている（リヴィウのアルメニア主教座聖堂のパンフレットより）。
- (15) 森安達也著『東方キリスト教の世界』筑摩書房、2022、215-216頁
- (16) 山田晶著『アウグスティヌス講話』講談社、1995、131頁
- (17) 泉治典訳『アウグスティヌス著作集 28 ― 三位一体』教文館、2004、16頁
- (18) 『アウグスティヌス講話』135頁
- (19) 前掲書 136-137頁
- (20) J.N.D. ケリー、津田謙治訳『初期キリスト教教理史 下』一麦出版社、2010、23頁
- (21) 『アウグスティヌス著作集 28 ― 三位一体』218頁
- (22) ルーカス・フィッシャー編『神の霊 キリストの霊』一麦出版社、1998、31頁
- (23) 廣岡正久著『キリスト教の歴史 3』山川出版社、2013、126-130頁
- (24) 「三十三箇条」は、第一項において聖霊の発出源に言及し、「聖霊は二つの発端と二通りの発出源を持つのではなく、源としては一つの発端、つまり父から生じ、子を経由するのであります」として、西方教会の「フィリオクェ」を事実上承認している。また第十一項においては「父なる教皇」と記して教皇の首位権を認め、さらに第二十五項においては、「ルテニアの修道院と教会は、ラテン典礼の教会には帰られませぬように」と東方典礼の維持を謳っている（福島千穂著『プレスト教会合同』群像社、2015、17-27頁）。
- (25) 前掲書 55-56頁
- (26) 『物語 ウクライナの歴史』75-76頁
- (27) 前掲書 124頁

- (28) 藤井悦子編訳『シェフチェンコ詩集 ― コブザール』群像社、2018、300–337 頁
- (29) ポーランド支配下の右岸ウクライナでは 18 世紀を通じてウクライナ農民とコサックのポーランドに対する大規模な反乱（ハイダマキ運動）が起こった。とくに 1734、50、56 年の反乱の際にはポーランド政府の要請によってロシア軍が反乱鎮圧に出兵した。「ハイダマキ」というのは「暴れ者」「強盗」を意味するトルコ語に由来する。
- (30) 『物語 ウクライナの歴史』149 頁
- (31) *The Orthodox Church in Ukraine, A Century of Separation*, Nicholas E. Denysenko, 2018, pp. 7-9
- (32) コンスタンティノポリスの英語読みであるが、近代史では一般にコンスタンティノープルと表記することが多いので、その例に倣う。
- (33) ユージン・クレイ著、西原廉太訳『ウクライナにおける教会間紛争はなぜ歴史的なロシアとウクライナの緊張関係を反映しているのか』、2022
- (34) 『キリスト新聞』2022 年 4 月 18 日
- (35) 宮川真一著「現代ロシアにおける宗教復興と政教関係の変容」『宗教法』第 30 号、宗教法学会、2011、1–29 頁